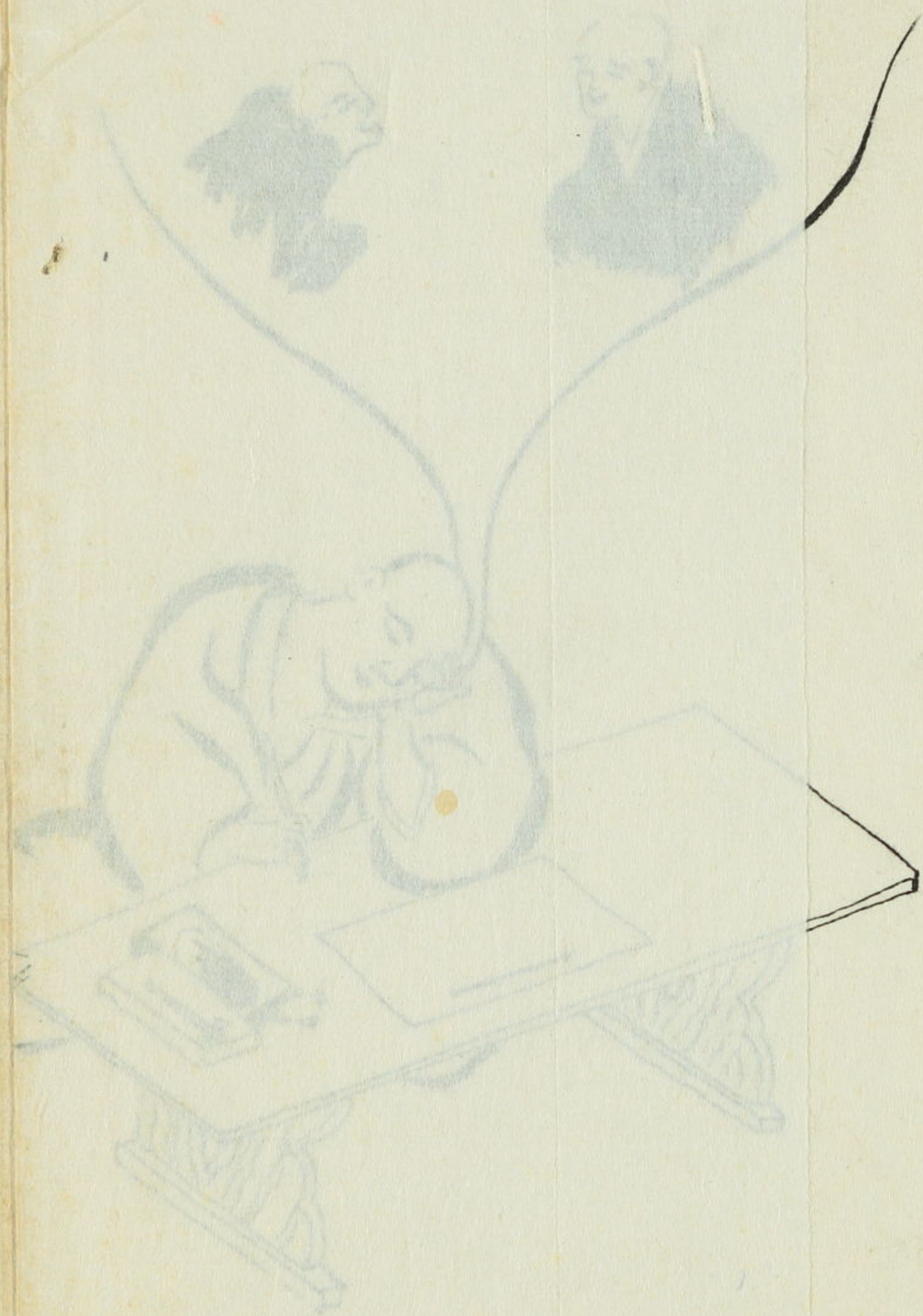


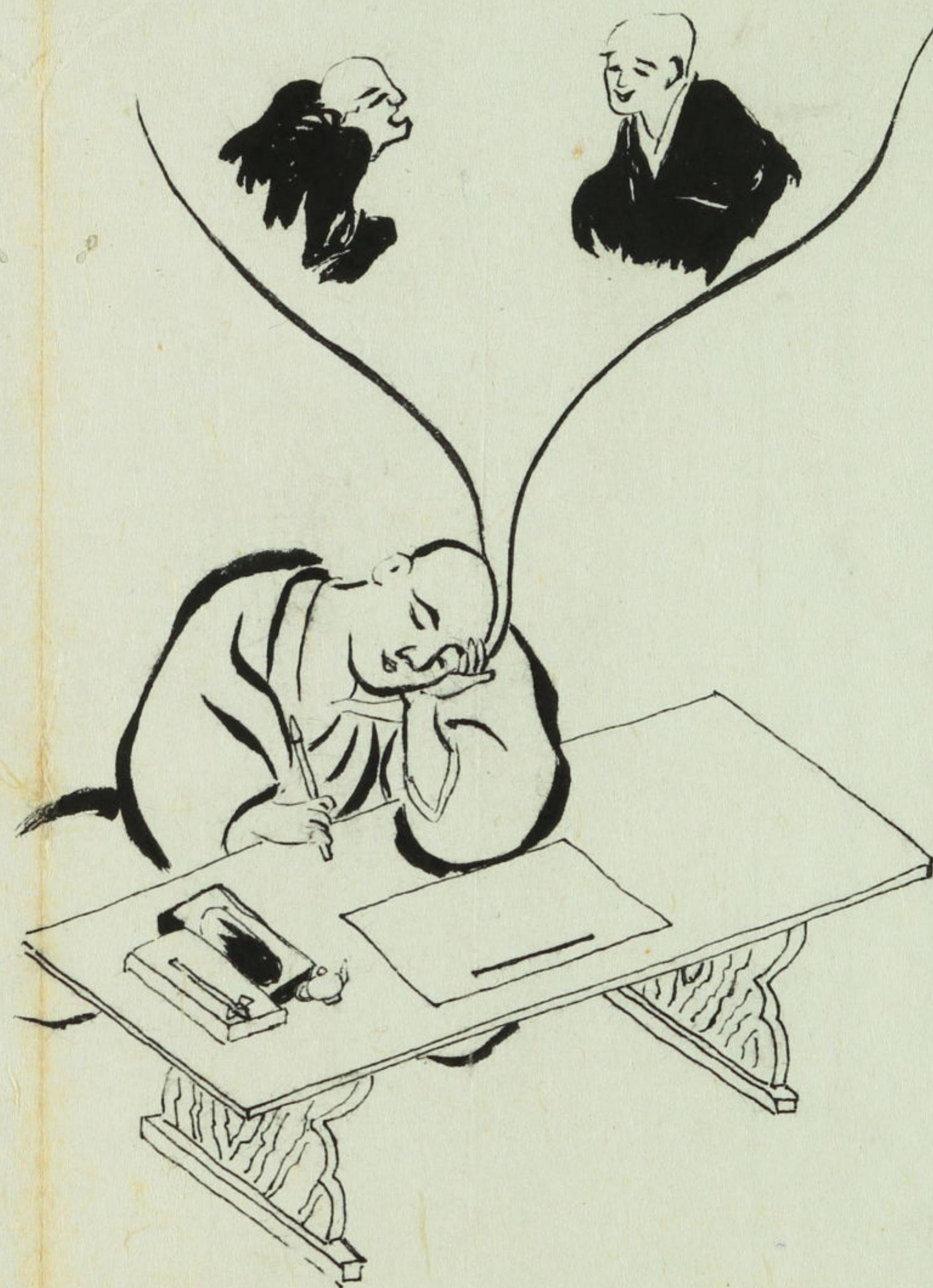


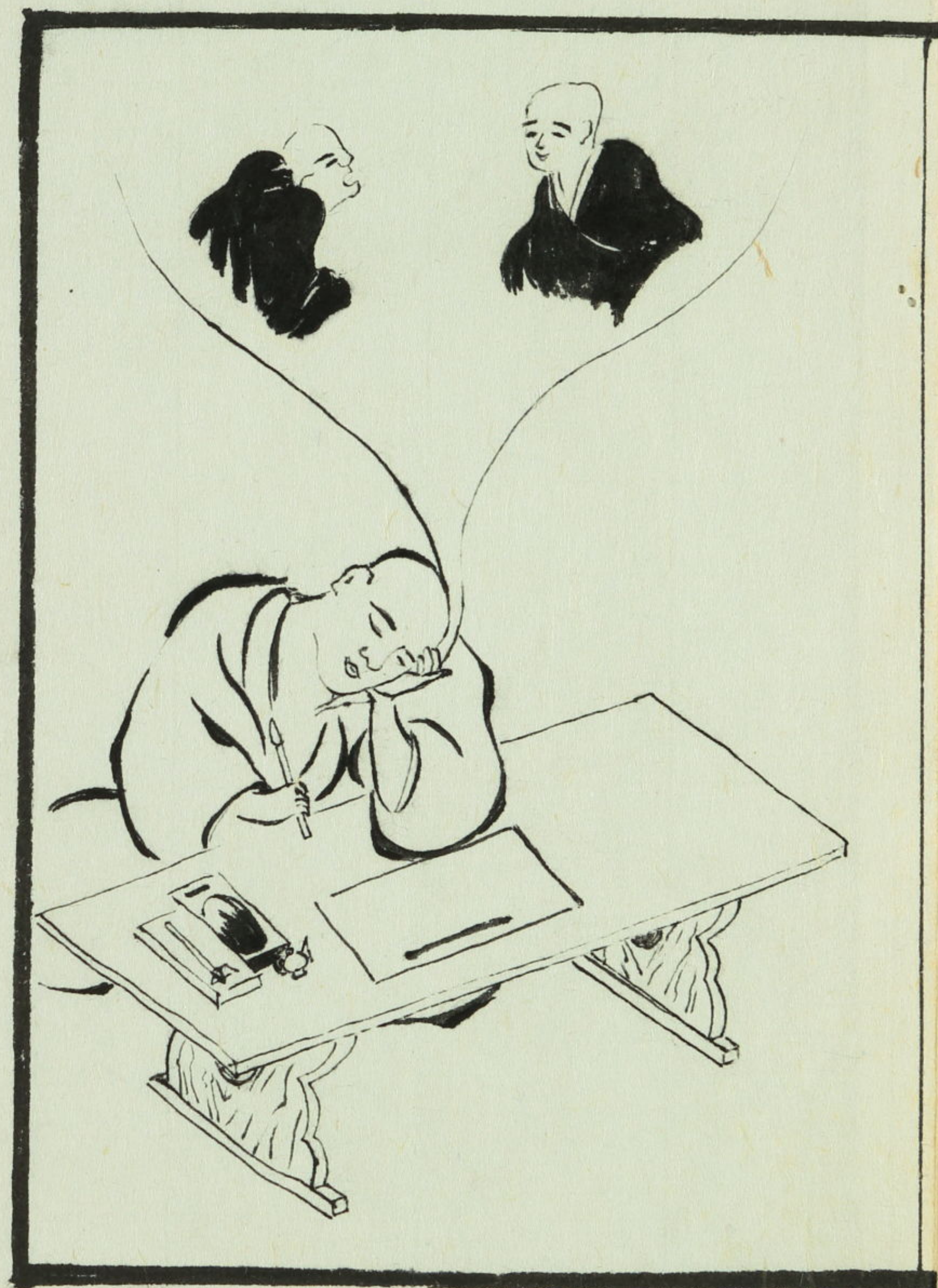
花月
一
打
福
主





太平會食記
大正十三年四月二十日





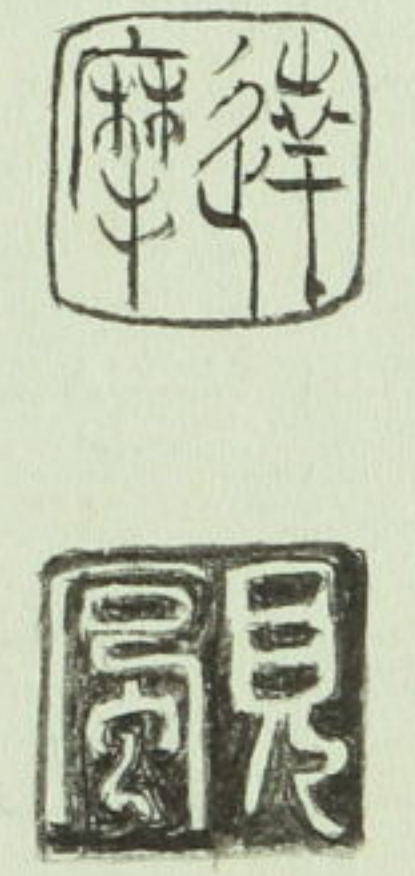
ことゝあつて 樂も 一 おのむを
 まけと 持ちて とも おのむは さん
 死する 人の 常 一 とき は
 むむ 一 乃 一 一 一 一 一
 若 物 一 一 一 一 一 一 一
 を 投 一 一 一 一 一 一 一
 斯 可 一 一 一 一 一 一 一
 ん 一 一 一 一 一 一 一 一

う あゆむと云の雲北山をう
うお海を乾く乃唇をさる
了冊を括りくうふ病牀を
誂からゆ傍るのきき可
あゆむ世小仲の筆のあら他
を思ふに薬ふあつきの切
いさ人を括りけききふらあ
すうれはけおをきふ日の客

とー予う一板の福あもあ
きけとちううきききかひけ
侍のきき筆のりききき
うい我をきききききき
細ううらきききききき
人きききききききき
郷きききききききき
あもきききききききき

面よりきこ日蒲園よりしる
きこる

ふき庵見風亭



一日湖南某僧寺のありとを衛しこれ加賀
竺の告白あるに鏡不坊と重光寺を扱ふ
ふねきとまきとせらば芭蕉塚をねまはる
なり誰持とすう是れつゝの如達師あり
おれあかふふと来しこのゆき
お話より一冊の縁起とれふ
し侍りに伴ひ終ひし海の池月坊あり
月や師とあり風雅の蘊奥を語し
更ほほまをいふす熱きおれとまきに師
説くか子載の確言やういふなりとれ

不^レ今^レれ^レ後の忘と補^レせとめず^レ小觚と探
す遂に一^レ抄^レと云^レありけぬ

明和甲申夏六月

無任坊

凡例

- 一 夾註旁訓の如く^レ無^レ任^レ考加^レふ^レ所あり
- 一 問答中にあ^レる^レ數^レ句^レの如^レ下^レふ^レや^レの名を記^レす
い^レふ^レ寺^レは^レ加^レふ^レ所^レあり^レと^レ云^レれ^レを^レお^レり
小^レな^レす^レと^レ見^レる^レに^レ了^レめ^レを^レめ^レあ^レる^レの^レ

二

一 抄

續^レ不^レ師^レ池^レ月^レ材^レに^レ儀^レ端^レ無^レ任^レ聴^レ祿

池^レ月^レ材^レ云^レく^レ木^レよ^レい^レな^レ弱^レの^レ雷^レ前^レす^レ師^レと^レ議^レ祿
更^レへ^レま^レと^レあり^レ君^レ見^レす^レや^レ東^レ都^レに^レ涼^レ俗^レ出^レす^レあ^レり^レ
類^レりに^レ部^レ詞^レと^レ破^レ一^レ片^レと^レい^レふ^レもの^レと^レ弘^レせ^レと^レ是
推^レも^レれ^レう^レま^レの^レ他^レ門^レの^レ邪^レ義^レあ^レる^レや^レい^レう^レせ

續^レ不^レ師^レ云^レく^レ既^レり^レ知^レまり^レ余^レち^レう^レに^レ錫^レと^レ鉢^レの^レ七^レ尾
子^レり^レま^レ法^レ遊^レと^レ安^レ樂^レ精^レ舍^レに^レ張^レふ^レ大^レ明^レ社^レ中^レの^レ三^レ三^レ子
片^レ歌^レに^レお^レ留^レる^レに^レ歌^レさ^レの^レも^レめ^レけ^レ一^レ草^レの^レを^レり^レま^レ
り^レあ^レる^レふ^レふ^レあ^レとい^レふ^レ書^レと^レ懷^レ中^レに^レま^レり^レと^レあ^レれ^レ

評をともふ余急に穢き徐子閑るに篇との終始章
この紀盡漫りよ古人を裁く大に當立と歎き巧
に所を評ひく已に妄量と書むむゝの招牌は
しよ堂ふ穢む人乃雅情を失ふのこゝろ即ち
邪見の端となすきとと知ふさうふを自是と物
しよ蓋するゝと評す評はぬす黙しと
おれを置たりこころの云ふれむゝ一芭蕉の門
未だ拙ひく持の風骨を信ずると云ふ鳴派人及
いは一消し日本の群籍を看讀しと今新あるを
切あつと忽ち已う名と改め祖乃徳と越し別に

一家とありと後進を尽靡せんとするの魔説也
そのかん持を是れと評せうと云ふ云くこころ既
子彼う誠祖の罪あるとと知ふなへ我他の評をまむ
名忠の臣の忠言必孝乃子の孝説をまう金く信受
ありて夢中の彼未だ性未だもに夢あり空華の
言路の開落ともふ空ふれに非理論中の是非はそ
非とも非ありめゆゝも火を救うに薪と用ひ湯
を止ふ小瀬をひますうと云ふや制しと未りぬ今
仁者う歎ある所も亦に何ふうゝに故く齒痛は
ふに足さるゝと云ふれ昔篇より一むゝより凉亭

の中は多く事なり所の仇猪頭は一箇の足味有り
多く蕉門の氣格はかゝる余もふりしれを廢
しものありきとふ今後とありく片歌の美歌
をうける蕉門の狗肉を賣しむとする人々忽ち
知れぬ鶉鳴中々多事俳家の口を破せしとを
直ちうけはけ或人のつらとて反きうにかれをも加
希因縁の大明かとう糟とてい鋪つるあれは酔ひ
いふ蕉家の醜とてにもほさうち忽ち吐逆し
今俳門と出よう片歌の美歌と吸いあふく口腹を卷
ふ口腹の爲め。津波をおのけ池まる草紙をおのけ

茶板とくくあれを南あふりやかふむさふり
きん根あふりく風雅の表面目を信じてやうれ
既に異端は陸一畢よりかんの地中の邪義とふ
しる何ん彼も彼よく置くの樂しきと求
ふ片俳諧の本とありの彼しすすちも又
即ち蕉三羽乃海澤あり

池月坊云くかれ既に蕉語と破し俳門を打ち
はさにか歌の棟を何けせとす持の俳門あり
くあれと推断するに在りく本家と集
ハルものありや吾儕の器ははされぬ

うんともあうん——師あんが柱折せさる

鏡本師あうんすれが怨望の色をなれや余ら
俳諧を業とせられ仁者、激勵の言ときけとも
奮發ある中、あうん——知ぬやいうかの調達
興のくハ正道を測り——うんもあうん自若と
持のは送りき安にゆくと後々の暢ききよく蕉翁
と破すとも蕉翁あんの害損、あうん雨すきに下世
の人とあうんくやう地、無道塔の、依然と——と
餘きりきつれとも蕉翁あうん——隣あうん風
の——扇さ草の——偃——うんくは光りたま

月くは同じをうさぬ今やあれを讀むおふ一か
をふさんともあうん——誰いふゆえとい後々の天熱風
雅のふきあうん持ちあうん——五るの地を領——と
京都の象頭子けの五法を説くとも名利乃
一臭軒より急らやのねを失ひ逸民中の暗合
ありき俳諧送死の醜名を子軒に残まんと世を
睨なうとも——かれあうん進門の末子朝——うん
いま片羽の新説をなすともやうともゆはれ
蕉門のうん——かうん——誰うん蕉翁先生後々大くと
補せんかの天熱、新説ふ人のともよく歸依せ

も瞿曇と同姓のよ——いあればありまきに知ふい
卿は彼に——するものも又則ち梵語の録澤ありとの
ふれふの謂ありさうしやかれいま名と片歌に改め
を古體に化しや

いつとふは堅魚物なと漕りる

さといふいとも傳ふよりじつめ

まとおふふありより友神のほ

おといふく自慢されとも大方の諸君おれくけふと
姉——うらすま——ま——唐人の五言古詩を伝
く古詩とまふを明の滄溟う耶すといふと

唐の古詩は唐の古詩——あるを選詩に比され
ら殆ど鳥詩の異と見ゆ今後わう片歌にわうの徒
たか片歌中——あると日本武の古體に比すれば
終よあれ没文詩ありは余余のお似や 是ふうさ成の
ふんや巴うの短便とつく古詩の深井を汲ませ
と欲せんよりなまの蕉家の口生似と——

——一重まよふは、夜うめ

わ——口拂に居るらそとをへに取めま——
近體の初の唐はあやう——あうふときい名を
片歌に改めとも句のおう——こも蕉門にあるの

さる一變——く片敷のい——は彼らむとあふ
我の好む所は志とらふ——伽羅は鼻を覆ふす
蒜に左敷く川もおのれ——稟識のさ——とす。お
そ他ち——

幅幅の樹はさるまの清しめ

おろし倒し懸はうねえ——却て往還の人を剛
小歩りくといふもわ——う——仙階の若闇會を
出らふ所の象頭山へけしものもなれ枝葉う芽
とあり——五百もいふ釋子の訪夢なふりや

他目坊え涼備もと希因大明ふとの糟粕と

こゝろから要口ら——かれまふから薬と買ふ
喻とひくふれとりといふ

鏡法師や薬を求ふの翁はれ希因ふとと師
はらぬとの迎れあふ——まれに愛る人のあきよ
買ふところあ——希因全く仙階を賣物とい
やれ蓋——されおろし今といふ他はわ——とさるもの
うへに價ひをさ——と求ふとて我買ふとらひの
價ひあきのな——施——と受かり報謝の一事で
もよく却て恩と仇わす醜ひすといふ集りく云々
吾力の太賊まふんとこころよりとらね集りといふとハ

とある代略セーものと持せしめて諸宗の末は日蓮の
一宗生れりといふ一達宗の職由（モトヨリ）とあるも云々太々
三の二条にあれば法華宗とも名し一とんとさう時に
忽ち天台宗と混すといふお尋と誤く彼れ一心と
觀とをいふと一此れは桶頭目と書しすれは職由の
とは法にあらざれといふ門の趣は差おあり故に
此の宗名と異なり片影は連歌も御誦と職とし
中法あらおあり一和歌の道あればと此の趣は差
おありと片影は片歌連歌は連歌御誦御誦
とあり味嚼も大豆豆腐とおあり大豆なれと既

は豆腐とありおられぬといふ大豆との名ありと
さういふと今後たう安量ら豆腐大豆の腐といふ
されは豆腐と名を誤りあり大豆とぬきぬし
と云ふといふと一あれはあんなや恵一と誤謬とに
まといふと二つありさう人の誤謬といふと各別シテ
此れは丁世の謬訛に（世間一同ノトナリコト）奈何とも
といふ一或人の云ふといふと我日本の言葉を天子を
大君國主と國の守郡代を縣司亭主と家の殿
法とふと上中下の分ありといふと今も天皇の
檀那の二字ありすやとありといふも是れあり

おあるをうら川う借うのへはれ一向宗の下
品あり食肉帶妻の境界を無他方便の悪業を
牽うそふよう取もあてさす因縁一乘の法門
あり今仏家の野鄙あり俗談平話の境界を無他
方便の劣業を引きさふあては中ふおのりう
圓融無碍一乘究竟の風範ありあり詳傳
蕉門の仏偈あらなくを看破しく地門も
同様の論あらなくを言傳し非うとりうの果
之仏偈の二またありぬと我そ入廿五條の亦二
條より四條より史記の偈偈を引く辨せり

されと旧解より史記をいそふとる司馬遷より
云出するよりあふた仏偈或は仏説のふあら
ふと思ふ菩薩八わふ現の時悉達太ふのむ
うーふれと專一のうとやふれは仏偈の名
天竺よりありく回よりきわむとに日かふ
佛頂盤陞の二禪師ありふと專一のうと
ありふとあふかの湖東の正林寺より強きふ
師運如上人あふのる類より全ふの連類とも
見えさふもすふは二師の法あり天竺の仏
偈諧ハタハレイハタシムコハロ浪笑ナト
イ、カナエルコロ俳諧ハタハレイハタシムコハロ浪笑ナト
ツク祖来ハタレラコハレヤレト翻訳セラヌ

弗一うふ。ゆ人蕉門の字に定まりハと句安
は五合のふらあにふくらかの滑稽の虚安月在る
かりしにふれ淡笑子即し風凍ありと要と
する由は天竺の仙謠より按さるあり勿論日布
く此ハ雲間抄は仙安のに名と号のよ中に一仙
二仙三仙四滑稽等とふおしあひ滑稽も
奥義抄は滑稽しとふと一説はのふに取らぬ
俳の名に定まりぬとれと名に天竺は権輿しと理
の史記の滑稽より出るとも事の本邦の連歌
よりうつろひはる蕉門の先進詳は滑稽

世をさし一抄の幽轍を振るゝ一仙諧の本源は到
此のあやかし偏屈はけ歌の名は仙諧と所は仙諧
は老後の樂しこと求むと自利と一現前のはは
抱あを利他とすれば四解にいつるゝ五偏風凍の
按排はしと滑稽の本懐しきれは世法の如節
もふ法の温厚もあふれさす口ある人間とあり
ものふらふも居る目よ角より理屈と暮
り類は節と法と開解は及びきより言語滑稽の
用と角を知り理屈とをめぐり道理と考へ開解
と措く風凍とのへる鼻老のと隔る如と

いづかしをいづかしとて、
儼ふとも破れたる温袍のきれを忘れず食らハ珍
五菓の味ハ飽くとも一瓢の飲の樂とてかえり常
は世情の交と觀しとて笑言ハ魂と振りて猛
将勇士もこれと口稱く弓馬の心と和け士民正
まじこむと井むとて耕耘の勞と忘れとて
走れぬ俳諧もさるおもしろいものありん
異さるものありとて五七の句ハ作り
涼しやんとけもたぬ後掌 足元
おもしろい偏の人とさるものありて世情の秋とやわ

幾ヶ山河江海のありさぬもさる月月のすこも妻
蔭田植の仕業まぐ目の前ハ取寄せく河決するよし
さるあや俳諧の耳はきくものありて月は見
ものありとねふらのけつりやん

耳はきく涼しやんとけもたぬ後掌 足元

池月坊主ハ二枚目若く文章とさるおもしろい唯
大やほのみのさぬありさるに浮き文章の事
俳諧のふとれハさるさるさるさるさるさる
全く言の葉のふとれハさるさるさるさるさる
鏡法師ハさるさるさるさるさるさるさるさる

器中一々あるを言とある一 言とある志と
通ずるものあればと國おのく 出来とある其の體
をくに行はれく今よ不朽の業とありぬさ々と文章
とありある一 大至まとのみのさ極あるとついに
害ある所あると一 又許ふ又考の業維諧の又
とく介ふ一と其處とあると遠つりとある
中、旁ある其人の放言ありたりや既よ又選する自
漢至魏^{ヤラ}文體^リ三改^ミせんとくおふ一 又家を於
あるとあるに其の體と改せとあり改や其の
家を異ふとあると又の體極とあると何乃遠

つゝもあはれまかり今古如漢とにもお
儒家の儒家のふり釈家ら釈家のふり我が
儒家よけくすし簡牘は簡牘の語内史や内史
の語の介賦頌表註解通俗等おのく綱領
相分見する一ふらんこまにおろし釈家の中
とも儒家と釋家と文體頗ほるなりきんを
解家するも年々人々也流家の文ありさや
さうと理は違へどもやらのほとりとてに者か
や源氏狭衣伊勢栄系のお経松子子太佐日記
等々の介寺の選集家のふり文章のきはる

あゝと都々和歌家の文章は其の雅清雅偉
靡からず源氏伊勢物語などといふに里閭穠藝
の語なれども野鄙ありきぬと云はれども又風流
なみの情態おのりり阿ふぬ殊又松平子
土佐日記などいふ勢多雅言を挿ひやうする所を
おしゝるものあれば又人耳に遠きとありさるゝ
地許六文考の筆墨果ては此文の一語を構へて
もいふ所のふといふにうゝと自在にうゝ諸家
を縦横に取て言を果てて意余りと考ふ凡
諸家の文といふやの語を横てうゝ章と云ふは其の

諸家といふものなりとありて儒門は其の理生
家詩人官府律令家等佛門に於ては理家
諸家秘家神家等其の外仙家医家易卜曆
数田家等といへるものなりと云ふ言ありて
奈は其のりかの和歌家の言澄々一は流暢清雅
なりと云ひしは其身よりいふ理言と簡なるゆへ
平易に似くよみあはれしと云ふ古来大に
解と貴にものあり許六文考の構へ本に云ふ
聖賢傳詩人官令の家言理律倫狀神祇の
語より醫藥神藝市井賣買の俗言といふは

もくもく其の意をいふとありて唯其の旨をあらわすを基に
て傍証あると海削一句と簡短なふりあるむ
さうゆふはくさう妙雅深乃語と求められともさう
俚俗ありてさう常語と難ゆれとも又其のこれ
か一語言ふの語味とさうとさうと明解の語い
ふ傳ちもわれ含意とありてさうとさうと人情と近
うさむられ許さうとさうとさうと平傳無あるもの
はすつきにありてさうと雅中の平易あると求め俗中
雅健あると語りのさうれども又考へて其の風骨
と其のさう人ありやありや其のさうはあつたものと

間うれは考のみを執事より議論精緻又脩辭
より達意と妙を考へたりありて其のさう今のはくさう
のさう考へたりありてさうとさうとさうのさう考へたり
そのさうありありとさうとさうのさうありとさうと
後太いさう金篇善とありてさうとさうと議論詳明
ありてさうとさうとさうと議論ありとさうとさうと
妥貼ありとさうとさうとさうと人々を欺くものなり
はくさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと
考へてさうとさうとさうのさうの選集ありて其の
あり蓋し天の才をさうとさうとさうのさうのさうと

とら五ふりり

赤のもとをらさるくのあらぬ 其江

他月材ち二取つるは家を以てふまをあらぬ
正ふをあらぬきとく言のまを以てふまをあらぬ
きとくもの中ふまを以てふまをあらぬ
式ふまをあらぬ 御まを以てふまをあらぬ
てあらぬまをあらぬとあらぬまをあらぬ
まをあらぬまをあらぬまをあらぬ
まをあらぬまをあらぬまをあらぬ
まをあらぬまをあらぬまをあらぬ
まをあらぬまをあらぬまをあらぬ

代活と云ふ字は當分あらぬかあらぬし梅
かきと松と必折とかむは松とまねは殊はあらぬ
つぎふふれは横とツキとくは横とくはあらぬ
うとおもひいふまはくは仮名よくまねけり
あやまちあらぬ——といふあらぬの理あらぬ
こつさるやとにかれは選る書の中う角
照滴布穀秋雞喚起息あといろく中集めき
まをあらぬまをあらぬまをあらぬ
集ふとくは種々の漢字漢字を並集る
集ふとくは種々の漢字漢字を並集る

まゝに違へんさうに和訓の戦中りあを辨
しゝ五加ち唐音あらを木の字をほゝく五
加木と稱へる葉の字に唐音はキといふとク
を添へくキと稱へる和風の音と一ま
楓と葉の形蝦蟆のよゝ似せぬと云ふカテ
を中略しゝカテといふと一いつまも新ま
儀漏いりすも後た大人と和僕の字は熟き人
と見えり祖翁の句かと雖もまゝに互
あふんいりせ

後承師云く何の直なると云ふ人予はまの明教

集を見ればといふもかの二叔父者ゝある又字の
一車順は於くら頗る擬計と云ふいふふふと
ゝあゝあゝいふふ止字をゝおれと編むの強弱と
熟閑と一にさしゝ龍詠地尾のみ有勝く計ゝ
るゝ一ツリに十乃一二と云ふひるの八九を知れ
はゝるゝかゝ放言をあらとおれゝゝくす川
を中よまふのさういふゝゝゝゝあや都る附
ゝさゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
とすゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

益ふ——此は同字が吟の各月と云くして賀
 代乃あふると知くあむすつてお撲とかしく
 正字角觥とあり正字ふねもやうな編越はんこく
 とと相叔さうしやくともやめするこやうする人あるうへ
 既は同字が吟の教先あるうへ云うた——異字
 同吟の禁制あることを知りて然れいふふ志等
 の古式や勿論ま考へるが八段の法則あるうへ
 初人を導く方便門ありくうて変化自在あり
 りやうかりさうと巻くものの中はまふにす
 ありともいふうの式はよく思ふとよく考へ

より正字をいふ改めやうと云う——やの——
 その又詞を費するあまりは益のものをねてめ
 正字ありともありと云ふれうこの益ふ——
 とらふんといふやうにやいと漢字とおわん
 いふやと正字と云ふやうやいふ——相撲と云
 を漢字と書くやう角觥とかき、みこ編と云くを
 漢字とおわく點滴とかき、みこ編鼓鳥みこ鳥と云く
 を漢字と云く布穀ふこくと云くかき、みこのや
 相撲の監觸かんしやくは僕氏の事いふと松お編みこの下
 幕如の諸書はな在——
 佛はつ夜やすうすう洗せんけりみこ

為相撲戲無能及者す
 佛夜すう洗けりみこ

ありきなり相模も角能も漢字ふらあしけき
あまふれと小補類會屋簷の満雨といふれき雷の字
あはしあまひら山川る湧と祈祀一吁嗟
く雨と清ふゆよ雪の字よきまりとれとかい
ふととといふより満満とかきと雨と清ふゆ
より雨清とかくられ雪和のちんやう融く語り
やうふもあしけかれあしけ點満のこふとあま
ふれとあしけふれ雪のさくしカキ算のさくしと宿間
の苔のさくしとと點満とさくふふととみ
な中卒やうと點満とさくふふり
總シテ文字ハ同
クテモソノトコロ

リノ趣ニヨリテ格別ニ違フコトアリ
タトハ山根トイハ山ノ根ナレトモ
匠書相書ナトニ山根トイハ兩眼ノアイダノクボキトコロヲ云カコトシヤ
タ中華ニテ主張ノ二字ヲトウドリニモフシツニモ用ヒ日本ノ俗ニ北ノ方
トイヘルニ字ヲ方角ニモ人品ニモ用ルカコトシ此類勝テ計フヘカラス
予にいくは一よりたのふと精求するんかれき
近世の和書を書きやうと方言國字のよりに
おくれの所へを知りて集和の群藉と涉獵常檢
一これと研究自ぬすふ至るより少動もふ
粗糖多一既又かん木鳥と布穀とかき喚起
をうとめんと譯せらるるもたのや原と紅明
七さるりゆふあち粗糖と隨ちりいうよち布穀と
列ふも思ふ三月穀雨の候ふるきためく

あるをいふ。止むといふより布穀といふ名もこれ
や一名陽鳩一名郭公日本よりよくいふ其形似鶴イナカ
長尾大如鳩イナカ帶黃色啼鳴相呼而不相集不能為
巢イナカと本草家の説あり。かく築孟軒も此
を日本鳥と歎未詳と評し。もと中土の布穀
のかん木鳥イナカに決定せんとて夢東より日本
にたふ更なるを尋合とて。益ありと
ありかん木に予、故に山中又多き。あるあり
なり。時より。是れ、ぬき、の形、鶴イナカより大

小鳩より小く首長く身瘦く蒼灰色に腋淡白く
黃色も帯ひたり。多長きといふ。尾もふま
る。あり。これ、終り。故に、山、河、さく。本、より
く。ふ。を。ん。に。さ。り。形、も。似。ぬ。夢、の。う。閑
字、を。催。た。もの。思。ふ。人。お。と。す。ふ。に。忽。ち。山。む。ら
お。う。

人多かり。あややかんある
近江中の河のあやまらされを野良鳩イナカといふ
かの民俗は、山、巢、ありと、け、み、お、よ、より、と、
トリといふ。和書は、見、こ、り、け、の、カ、ツ、ウ、と

うらぐーかれ著述をあらく考ふは中氣め
けり。例證の名と要しあり日本——さうこ——
の名よや後介——といふとえれを却く所殺
喚起するふと中氣の名を面とおれり。日本
のみよといふ男久き女ふよの介あり。家譜椿
草等の名品をいふ海舶来の文字あらぬ。中氣
を擬すふもよ——とおもひ。あち宝雲約丸
盆天家伊直鉄原浄理松のハるるハ重機
楓と日本めけふ久きとわのまに取ハてのホ
ホれおれと。新訂地底の久きとわいつととかく

華和のあぢよそ嵐——一も準繩の立らうと
ふ——され上あり——かれいふと。芳氣消せ
見識いふと。字々ふふふり。予もわい——靖陽乃
字と志れとあり。——年廿有三——寛延庚午
夏五月十八日舟と浪集よりあ——る彼地へ到り
辛未夏六月浪花に還る。さう——かの学がみ
朝夕すうに頗る華言の清雅なりとを記
皇和未歴の俗供のる面大に形なりと覚え
一書も編むるあらを轉記せんと欲し。日あり
筆——勉強——く。屋——と。此は年あり

其の考索は備あり、教部の字書を以て及ひ
唐譯漢語熟字を以て漢字方言國字の解文罪
譯箋和讀に帖語草等の雜書多く並集し形が
作用の字面より勿論おもひよる鳥獸虫魚草木
の形より陸機の疏より師曠張華段式禽經黃省曾王齊登鷹品黃省曾虎苑黃省曾魚經國產魚名黃省曾解語傳時珍の本草李密宮の艸及狀江文
通の草木郭頌郭郭駝郭本草の續樹書沈默齋沈花譜
省曾の福品陳枝陳花鏡三路花史世懋不果瓜
蔬の疏本註名區別錄中一五一の諸心衣服
器財等にいろいろ格物州府縣志のこれ雜俎

合璧影照類書常花御覽圖會圖原等書肆
浪華の柏原氏京華の河南氏八尾氏等は依り
求れども多部の浩翰急より連に閑し
さうとされし花の譜讀めり則ち鈔録と
朝夕の視聽ありありおのお稽考を助け花の氏字
に深き向ふおのお縮み水田玄叔石上山貝鳥信
松玄達和祖太妻堂伊藤井澤等の諸心の
りりりり門生の帳中お珍お紫お傳お寫の草稿を
もさうおのお還研究とすおのお組お束の
大家をおのお端お誤りありとすおのお花のあれと今

又居くす。凡そ南北の隔より、其のまゝい
 めゆるもの歟。うゝとて。セハキ日本、ウチニテモ畿内ノ蜀黍
 畿内ニテ南蠻黍トイヒ畿内ノ蕃藪シ北國ニテ南蠻ト云北國ノ小
 黍ヲ畿内ニテ黍トイウカニ物名ノ異ナルコト勝テ計ヘカタシ
 況ヤ希里ノて薩と隔絶し、さる中、華や日本、
 あんが背底あきとと、人々や、さるる、
 中華ノ秧雞や、ふ鳥々日本や、水雞スイキとらふ日
 本の雲雀ニバリも中華やそれ告るふといふと、受へず
 可ふんとした水雞の二字より日本記にも見く雲雀
 の字面は、ミチ圖會にも依按か、中と誤字や
 る捨つてきたり、あゝん、とふ、の形狀、
 用の字面は

格おお名の字面、偏倚さうさうするのみおの空
より時代よりふれたおふはありく中華ふふさ
ものあり中華ありく、私国ふふさもののあり或
る形名同一さうものみ形同一く名のさうふふの
名ふおふくれども形状のさうふふもの時代あり
おふく変化さふもの新おのものふく新名と共
ものありおふ客島ふふをさうく、窮竭さん
や既ふ中華の弱く日本つう川さうく日本の弱
ふ中華の強弱さうく中華の權弱さうく日本の弱
ふく日本のけいさうさう中華の弱さうく中華の難

の類も所無ありといふおかしき
 其のカタテの利訓乃
 とし順、初也抄に見る五加の唐音あるといふ其系
 う和本草にも出されしに後たり茲のよらあは
 是も日本の楓^{カエデ}に中華の槭樹^{カエデ}なり菊も本字ハ
 鞠とかくつふふれと中華も日本も這時通例
 古々通用しありといふれに我知然あるといふ
 といふも其位ふきとありといふ椿をツバキといふ
 訓くといふとあしといふ楓とカテとも訓くといふ日本
 のツバキに中華の山茶花あり日本^{サザナ}の山茶花に
 中華の茶梅あり日本のヲカツラといふ中華の楓と

中華の楓の日本のカナエはあきらかに本草に
いちふらく中華の槲の日本のツバキと異なり
る葉子やぐもむらぬ一止ふく沈下
もくや月落ち夜ふけのれに餘輝の明
る葉の會ふなり

喜佳材

敬ふ蕉門の諸君より自ら羽立自筆活の書山本會一と漢
字和字の正誤より秘の句ふと偏ありしととく
強解しう二日信とふりくちびあれとあて持
まわさむふらふくさかへりかきととる
のと一留まのめ一のすめよりくまりは瑞のしりぬ

二日^ノ翁^ノとなづく
一か^ハはよいとか
つて^ハ様にちり
はむ

ふと一瞬如甲申のふりふ月
都覇の雲前より通ぬるの
一あらはに横ゆや乃白浮を
それかれは減くはてなむ

こころも

水に横く

れと

鏡心切

懐の中は

こころ

他月切

ふりしき

飼猿の心とくふくやふの月
一ふら乃澄と中よりくきれぬ
東武 秋風 卷阿

しん

角ふ似くものきく宿や花の夢
星合や 四葉の持もけく
雲ノ雪ノ花や花の大堰川
春ふらふりす川海と、厚く川
水仙と花と葉とあわす
ぬふ唐乃すくも 二三月
片枝の干菜より梅の赤
帆より花より花より 月
そあふく持ふるやかき 春葉
赤葉や面もふりし 月
柳 蝶夢 山只 天池 嘯山 浪華 馬明 大津 文素 可風 麻石 夢浪

皆比はるふ障子の如や 葛蒲草 二。材
 七夕や巻ふりく乃 秋山更ぬ 波下
 何れもる書の 初音や くらり 樗良
 綿ぬきや 朝馬く 足れや お 字均
 草鞋の紐より川むけら 何れもる 兎流
 何より通、斯らり 音を 沙干 泉
 内よりと 言ふは 言ふ 秋なり 也 有
 茶のわら 盤もあり 桑 馬六
 水の中 出く 海乃 言さる 已人
 なるといやはに あり 川水 蓮阿

叫と 恋とく さまく 回 撫り 佳沙
 草薺や 藤入る 山さ むーの 夢 茶ト
 人格の 高、 樹りく 沙干 水 也水
 何れも 火や 風も 消へ 秋十
 押さ 秋の 夢も かり 葉月
 鴉子も 月の 夢も かり 有蘭
 花の 夢か するに 二月 有蘭
 蘭乃 香る 夢と 月夜 冬白材
 水田 一も 夢と 夢と 梅の花 白杯
 花の 夢と 夢と 夢と 夢と 可桂

振さくもいれもの臭——衣久、
 五波の草うさ——さうねの秋、
 俗修や 吉田おしやく我のあさり、
 涼ささめ安よしやあれいぬ日も、
 移の雲や灯をとりくも、
 傘ささく人あきりきされぬ、
 残夏のあつめや おと又一重、
 来日ふく古おもあり いちさきぬ、
 返つての身おら何とさるの夢、
 三日月や 影さうきい 入舞見、
 心来枝

和光 達夫 坡曉 隆五 暮三 二江 一松 菊出 里蕎 心来枝

うねれ川とく 家くね付く黒うね^{シチ}
 短うさよと豆——くや 窓の重なり、
 いとぶとにきくゆき乃柳、
 揃さくややの月も又花あり、
 花さきに花あけさるもさあ、
 ねおら——いふ言はく涯の海あり、
 煙打や 鶺鴒の尾も うちささく、
 湯お師らさふとふのく弾の夢、
 琴よふ月ふと抱くや せいの夢、
 砂北く地さかすまぬ田舎の

秋水城 龜六 加紅 久井 太中 幾布 桃嶺 市帆 雉爪 杉呂

帆をくらは松とささる時ぬる
 砂をくらは松とささる時ぬる
 風をくらは松とささる時ぬる
 緑をくらは松とささる時ぬる
 鉄炮の音も中りく川きり
 野もふとふあふかく離る
 川骨や水の矢さきの楢は暖
 夜ありく星はあふくやふく
 朝もく星はあふくやふく
 人あふく起く星はあふく

吾仙
 楚果
 光九
 蘭夫
 元完
 佐秋
 徐焉
 逸枝
 歸由
 藤谷

蛙国もく星はあふくやふく
 星はあふく星はあふく
 人あふく星はあふく
 夜ありく星はあふく
 朝もく星はあふく
 人あふく起く星はあふく

巴吹
 江鳥
 荷山
 晩居
 知十
 文史
 萬郎
 麻父
 蘭夫
 東起

一六六

其聲

まくくとすもあひくさうふ
 家部と川風の音んさ柳の
 浪舟のさ陸もあり山さう
 性吟や ぬさ乃 藤とおく
 挿ぬりや まる川もあんな
 ちさう居や 熟柿の風もさう
 かり橋を 移れさうさうの月
 月さくくさうさ 侍舞や 夕雲雀
 音さかり 水のささかー かんこる
 足跡乃 伸、さうさ 汐干うぬ

柴谷 梅典 楚江 雨幸 趙路 怨風 鬼洲 斗雲 王朱 合浦

産水さのさうさ 性うぬ
 出市ーや 這うさうさ 不審然
 海さ 洗うさ ぬあさうさ ぬ
 山さくくさうさ 廟や ぬさ
 ふさや 陰ぬさうさ さうさ
 翡翠の 吐角あさうさー かし川りさ
 さ 垢當や 町さうさ けのさ
 叫さ 忘乃 介さうさ 豚魚け
 美さ 理や けさ けさ 投りさ けさ
 新影如 頃さ ます日乃 家ー ぬ

吟童 南耕 咀花 僧 南溪 大椿 大朋 開工 可井 父近 可席 不羊

和らぎに看經の燈ありあり
 稲妻のおきつむや 池の月
 落ひかり——面ふ—— 風中
 持水りふぬる風や 蓮乃葉
 お箸乃好食あり 山さう
 風流ととち——向くも 柳の枝
 雪や 新白り 多乃あそび
 山吹や 日と照りふく 星の光
 新新や 冬うしの 神宿のまじり
 たいふのむくひより——神のうき
 主浦 湖風
 梅洗
 芦汀
 桃川
 敷原
 河原
 今頃 波柳
 螢窓
 盡夕
 杖橋

結構ふきを笑つてさうね
 海うねく 世裡ふ笑ふ室の梅
 恥——心持た 器量り 達さう
 子ち産のふく——凍—— けす 秋
 山寺乃 おより 極めさう 幼きうね
 笠船の満きうの ふうるうね
 湖くおろき 流るや 鴈乃夢
 いや——ふふあふやき——の人
 羅と 蟬と 忘れたく 思ふね
 風流の 音まらうの ありさうか
 破如
 梅屋
 純友
 旭松
 孟由
 二旭
 洞月
 女 いく
 鳥曉
 僧 序康

孤丹
 鳥乃腋まきや 東乃集
 加賀 羽仙
 草の 目のあつや 沼澤像
 湖ら かに あつかり 野井
 帯 ねく 痛む ねく ねく 知耕
 名月や 志川や 一と 居る 蟾の 蟾
 婦 兒雀
 静さや 障る 屏くも 蟾月 眠候
 出代や 痛りまゝ 猫の 見風
 素風の あけ けの よゝゝ 柳の 可朝
 夕刻や 娘 ひとり くら 見度

一廿九

夕のまや 帯むすん ねく 婦
 物見く 裾より 毛の おく ねく 風逸
 すゝさや 井の 痛の と ねく 九木
 との 痛く くら くら くら 泣く 金澤 風古
 痛く くら くら くら くら 泣く 半化坊
 月と くら くら くら くら 泣く 如本
 沙く くら くら くら くら 泣く 可枝
 人よけ。 町の 痛さや 蟾月 暮柳金 後川
 笠きき くら くら くら くら 泣く 僧 談夕
 裸より くら くら くら くら 泣く 玉川

名残——と云うもさうや清さう
 水音のふりさうておきふ
 海棠や 暖かい、月日の月よ柳、
 山——と訓するふ山の形、
 名残は名もさうさう、
 さうさう、おきふさう、
 外のもや、さうさう、あさむさ、
 日六位のおぬ、さう、
 山梅、さう、
 名残、さう、
 月のおき、
 佛仙

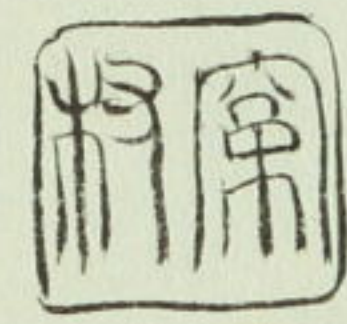
尾 誂涼
 蘭尾
 謝菴
 夢水
 素園
 女 素人
 さハ
 之甫
 野々
 佛仙

日——と云う、
 まぬくの、後さうや、
 おの、おき、
 笑け、
 吸ふ、
 ふう、
 粗印の、
 月の、
 一家、
 祖細、

大正寺
 八水
 紫狐
 越前
 婦
 歌川
 已文
 蜈山
 左榮
 東枝
 似扇
 三思

小る倍なり是「す」夫のさうりむとあふんあふんさう人をいらいふ
 へんやけふ冊の執りまうふ他月分の読書とて一凌子、建蘭
 不塔を明一毎毎の費を誰するんが羽龍師乃や龍と汲て一書一書の
 私を用ひて病は減まにせし一書は正の全福とて一書一書とて
 そんを洗破しと虎をばんとあふんあふんは後虎とてさうふ
 初学の惑ひあふんあふんは後虎とてさうふ初学の惑ひあふんあふんは後虎とてさうふ
 遊ふも風接あふんあふんは後虎とてさうふ初学の惑ひあふんあふんは後虎とてさうふ
 ともあふんあふんは後虎とてさうふ初学の惑ひあふんあふんは後虎とてさうふ

南壽涯 已文



一ノ四二二

富家書藏

兼月一歩筋一冊とす 後永正日禪寺住録
 永月二目論一冊追刻 同前

昭和二十二年十月十二日

皇都書林

同

藤川通佛光寺下町

河南四右衛門

二条通富

野田藤八

行 葵

大頭山平國寺
上卷

卷二

